

書評

青木省三, 村上伸治 責任編集
専門医のための精神科臨床リュミエール 23
成人期の広汎性発達障害

田中康雄

本書は、『専門医のための精神科臨床リュミエール』第3期の1冊として上梓された。そもそもこのシリーズは、現代精神科臨床のなかで従来の教科書では看過されやすいテーマを最新かつ多面的な視点により掘り下げて論じること、精神科医としての知と技に一層の磨きをかけることを目的としている。

結論を先取りすると、本書はこの目的を遙かに凌駕したと評者は断言する。

この成功は、ひとえに編者であり執筆陣の要としてご尽力された青木省三氏と村上伸治氏という稀代の名コンビのバランスの取れた臨床感覚の成せる技と直感する。

それは、本書の冒頭を飾る青木論文(「成人期の発達障害について考える」)と、最後を締める村上論文(「私の精神療法的アプローチ広汎性発達障害への精神療法」)をまず読んでいただくことで誤りでないことが分かっていただけのだろう。編者である2人は、ともにこの臨床に登場してきた難問に対し、難しければ難しいだけのやりがいと対策が必ずあることを述べ、ぶれることない臨床家としての姿勢を貫き示す。

タイトルだけで本書を購入すると「成人期の広汎性発達障害」を網羅したものかと思われるだろう。しかし、冒頭から「理解としては発達障害を広くとり、診断としては発達障害を狭くとる」(青木)と述べ、「『広汎性発達障害への精神療法』という課題を突きつけられることで、精神療法がさらに発展していくことを願いたい」(村上)と記される。それぞれの筆者に同意反発したりしながらあれこれ頭を忙しく働かせながら読み終えた評者は、この始まりと終わりによって、精神医学の確固とした普遍性にたどり着いた。その意味で、あまたある類書のなかで、もっとも優れたものであると確信する。

編者に挟まれてなお、輝きを放つ滝川論文(「成人期の広汎性発達障害とは何か」)では、縦断的に発達軸を視野にいられた新たな診断分類とそれを支える臨床眼を鍛えることが強調される。宇野・内山による診断に関する論文では、診断の意義を前にスケープゴート的な診断行為にならぬよう強く諫める。さらに自らを発達障害でないかと疑い受診される成人の方々の現状と危惧について、太田・湯川・加藤論文は日々の実践をもとにその苦労のあとを述べる。ここには昨今の発達障害ブームとも呼べる流れに、冷静に丁寧な精神科臨床を行うべきという当たり前の提案がなされているわけであるが、これほど強調する必要があること自体、この分野における現今の課題であることに気がつく。一方で、それが間違いなく存在するのだという実証を、加藤氏は生物学的研究から論じ、中根氏は長期の経過と予後を示し、綾屋氏とニキ氏という代表的当事者からの言葉で第一部の総論が閉じられる。

続く第二部では、広汎性発達障害に関連する障害として、統合失調症、うつ病、双極性障害、摂食障害、強迫性障害、解離性障害・転換性障害、パーソナリティ障害が述べられる。タイムスリップ現象とフラッシュバックや解離、緊張病とカタトニアなど、まだ解決されえない症候から改めてこの分野が抱える課題に手がつけきれていないことも明らかとなった。

第三部には大学生を対象とした援助、デイケア論、当事者支援、グループ療法、薬物療法など、手探りながらも構築していこうとする支援論が列挙される。なかでも三好氏の臨床から作り出された手作りの精神病理学を基盤にした治療学は興味深いものである。最後に宮川氏、井原氏、と前述した村上氏の個人精神療法が個々に述べられている。この流れで自家薬籠を開示するのは、非常に勇気がいったと

思われ、それぞれに敬意を表したい。

この臨床像が 21 世紀における精神医学の解体と収束を担っているといっても過言ではないだろう。同時にわれわれが今こそ行うべきことは、腰を据えた臨床である、そんな当たり前なことに気づかせてくれる本である。それだけに、現代精神医学のなか

でも必読の一冊としたい。

(こころとそだちのクリニック むすびめ/北海道大学名誉教授)

●B5 304 頁 2012 定価 8,190 円(本体 7,800 円+税) 中山書店